

李白詩の傳承に関する一考察

著者	鈴木 修次
著者別名	SUZUKI Shuji
雑誌名	漢文學會々報
巻	22
ページ	1-11
発行年	1963-05-25
URL	http://doi.org/10.15068/00148544

李白詩の傳承に關する一考察

鈴木修次

一

李白の詩文集としてこんにち得られる最古の版本は、靜嘉堂文庫に所藏され、昭和三十三年には京都大學人文科學研究所で影印された李太白文集三十卷である。それは平岡武夫教授がすでにいわれているように（「李白の作品」序説）、元豐三年（一〇八〇）刊行の晏處善本の複刻で、北宋末から南宋の始めの版本であると考えられる。その宋版李太白文集において、おそらくは樂史（九三〇—一〇〇七）や宋敏求（一〇一八—一〇七九）曾鞏（一〇一九—一〇八三）らの業績をも集録したのであるが、一本にかくかくに作るという校訂が處々に加えられている。それは、杜甫の詩文集のこんにち得られる最古の版本である嘉祐四年（一〇五九）王琪刊本の南宋初期における複製本において、やはり一にかくかくに作るという校記がすでに加えられているのと軌を同じくする。李白・杜甫の作品の取扱いに對してなされた先人の注意深さを知ることができる。一本に見られた字句の異同は、なるべく忠實にこれを傳えようという古典の處理に對する人間の知恵は、中國において、十一世紀

においてすでに實施されていたのであつた。

李白の詩についてその校記をしらべてみたとき、一本にかくかくに作るというその一本が、しばしば、いちじるしくちがう表現句を傳えるものであることに氣がつく。いまかりに、始めに位置する「古風」五十九篇の範圍に限つて、宋本の注記をもとに、一本として示された詩句のいちじるしく違うものを注意してみても、たとえば次のような異なる傳承の例が求められる。

1 「古風」△其七V（王琦本も同じ、以下王琦本を王本と略稱する）の宋版注記による一本は、全十二句のうち四句を同じくするのみで、あとの八句はいちじるしく異なる。

2 「古風」△其十三V（王本は△其十四V）の一本は、四句多い。

3 「古風」△其三七V（王本も同じ）の一本は、二句多い。

4 「古風」△其四六V（王本も同じ）の一本は、首六句をまったく異にする。

5 「古風」△其五四V（王本も同じ）は、全十句のうち、首

四句以下の六句が一本はまつたく異なる。

6 「古風」△其五九V(王本も同じ)の一本は、四句多い。

7 王本の「古風」△其八Vは、宋本においてはその卷二二に「感寓二首」△其二Vとして掲げるのであるが、首四句の首句以外の三句を、宋本注記の一本は異にする。(例は後に示す)

宋本の注記による一本の顯著な相違は、なお次のような例において、さらにいつそうはなほだしい。いま、きわめていちじるしい相違を有するもののみに限つて、その詩題を列挙する。

1 「相逢行」(宋本・王本、卷四)：一本は四句多く、また一本は、二句ずつ二か所を別の句に改め作る。

2 「淮海對雪贈傳鑑」(宋本卷八、王本卷九)：終りの四句を、一本はやや異にする。

3 「贈崔郎中宗之」(宋本卷九、王本卷十)：一本、首四句をまつたく異にする。(後に例示する)

4 「叙舊贈江陽宰陸調」(宋本卷九、王本卷十)：首六句に續く十四句を、一本は三十二句に作り、そのなかには若干の共通する句を含みつつも、全體的にはいちじるしく異なる。

5 「安陸白兆山桃花巖、寄劉侍御緇」(宋本卷十一、王本卷十三)：首六句を、一本はまつたく異にする。(後に例示する)

6 「新林浦阻風寄友人」(宋本卷十二、王本卷十三)：一本は、四句多い。

7 「下尋陽城汎彭蠡、寄黃判官」(宋本卷十二、王本卷十四)：一本は、中間の三句、および別の二句をまつたく異にする。

8 「秋日魯郡堯祠亭上、宴別杜補闕・范侍御」(宋本卷十三、王本卷十五)：一本は二句を缺き、その代りにその部分に別の六句を増す。

9 「送王屋山人魏萬還王屋」(宋本卷十四、王本卷十五)：一本は首四句を異にする。(後に例示する)

10 「越中秋懷」(宋本卷二二、王本卷二四)：一本は首四句を異にする。(後に例示する)

11 「寄遠十二首」△其七V(宋本卷二四、王本卷二五)：一本は終りの二句を別の四句に作る。

12 「哭宣城善釀紀叟」(宋本卷二四、王本卷二五)：五言絶句であるが、一本はやや異なる五言絶句に作る。(後に例示する)

右に示したものは、いずれも詩の句をいちじるしく異なるもののみであつて、一句ないし二句の範圍において表現を異にするていどのものは、たとえ次のような例があるにしても、そのすべてを省略した。李白の詩において、一句あるいは二句ていど相違するものは、一々枚擧にたえない。そのなかには次のように、ずいぶん異なる傳承を傳え

るものもある。

三盃拂劍舞秋月 三盃拂劍舞

忽然高詠涕泗漣 秋月忽高懸

〔玉壺吟〕宋本卷六、王本卷七)

白馬小兒誰家子 白馬金鞍誰家子

泰清之歲來關囚 吹唇虎嘯鳳凰樓

〔金陵歌、送別范宣〕宋本、王本共に卷七)

三月咸陽城 好鳥吟清風 關鳥語成歌

千花晝如錦 落花散如錦 庭花笑如錦

〔月下獨酌〕八其三、王本卷二一、王本卷二二)

こうした例から判断したとき、宋本にいうところの一本なるものは、書寫の過程に生まれた單純な異本ではなくて詩そのものの傳承の相違、さらにいうならば、口から耳を経て傳誦される過程において生まれた「異本」をも含まれるとほぼ考えることができよう。

二

宋本において、一本として示されている作品のちがいがいかたについて、もう少し具體例に即して考えてみよう。上段は宋本の本文、下段は宋本の注記において、一本の形として示しているものである。

紀叟黃泉裏 戴老黃泉下

遷應釀老春 遷應釀大春

夜臺無曉日 夜臺無李白

沽酒與何人 一 沽酒與何人

〔哭宣城善釀紀叟。〕宋本は一に「題戴老酒店」に作

るとして、下段の作品を引く。五絶)

紀叟(戴老) 黃泉の裏(下)

遷た應に 老春(大春、いずれにしても酒の名を釀す

なるべし

夜臺(=死後の世界)には 曉日(李白)無し

酒を沽りて 何人にか與ふる

「紀叟」は、宣城の釀造家の名であつたことが、その題によつて知られるが、「戴老」は、戴なる姓の老翁の意であらうか。李白は、紀叟にも、また戴老にも、その死をい tandem 同様の詩を贈つたのであらうか。そうしたことも絶對になかつたとはいきれないかもしれないが、そのように單純に判断してよいかどうか、さらに一考を要するよう思う。あるいはどちらかの作品は、李白の作にあやかつて作られたものであるかもしれない。二つの詩は、ともに李白の作として傳えられてきたのであるが、そこには李白にあやかうとする人たちの制作も混入してはいはしないか。單に贋作を作るといふ意識ではなく、李白を愛しその詩を愛するため、李白まがいの詩が生まれたといふことは、ありうることである。あるいはまた、李白の原作が多くの人を口を經過するうちに、なまつて傳えられ、やがてそこに、書寫によつて生ずるのとは違つた意味の異本が

生まれたということも、またありうることである。李白の詩は、そのあるものは文字から文字へと、視覚の世界において寫しつがれてもいつたであろう。しかしまたあるものは、人の耳から口へ、口から耳へと、聴覚の世界においても、語りつがれ、うたいつがれていつたであろう。記録をいつも座右におくということは、経済的にも、社會風習としても、限られた人においてのみに可能であつた時代にあつては、詩のあるものは、たしかに記憶によつてうたいつがれる可能性が強かつたと思う。記憶によつてうたいつがれつつも、同時に記録にとどめられ、またこの記録から口誦による傳承がはじまり、かくて、複雑なからみあいによるいろいろの「異本」が生まれたというのが、李白の一部の詩の傳承における、實際の姿であつたのではなからうか（李白の詩の、すべてがそうであるというわけではないが）。

そうしたことの想像を可能ならしめる例は、なお數多く存在する。上掲の紀叟、ないしは戴老をうたう作品の場合、詩の表現の一部が若干變えられて、ちがつた詩が生まれているのであるが、以下に示すような例になると、句の一部が別のものにすりかえられている。

咸陽二三月
百鳥鳴花枝
玉劍誰家子

咸陽二三月
宮柳黃金枝
綠幘誰家子

西秦豪俠兒 一 賣珠輕薄兒

（宋本卷二二、一感寓一八其二V。王本卷一、「古風一八其八V。はじめの部分。王本は、宋本において一本として示したものを、すなわち下段に示したものを本文として扱い、上段の文を一本の形とする。南宋の楊齊賢の集註をもとに元の蕭士贇が補註を施し、明の許自昌が校刊した分類補註本が、すでに王本の形になつてゐる。）

咸陽 二三月

咸陽 二三月

百鳥 花枝に鳴く

宮柳 黃金の枝

玉劍 誰が家の子ぞ

綠幘 誰が家の子ぞ

西秦 豪俠の兒

珠を賣る 輕薄の兒

胡鷹拂海翼

胡鷹度日邊

翱翔鳴素秋

兩龍天地秋

驚雲辭沙朔

哀鳴沙塞寒

飄蕩迷河洲

風雲迷河洲

（贈崔郎中宗之。始めの部分。本文の「胡鷹」は「胡鷹」に作ると宋本の注記にいう。）

胡鷹 海を拂ふの翼

胡鷹 日邊を渡る

翱翔して 素秋に鳴く

兩龍 天地秋なり

雲に驚きて沙朔を辭し

哀鳴 沙塞寒し

飄蕩 河洲に迷ふ

風雲 河洲に迷ふ

雲臥三十年 一 幼採紫房談

好閑復愛山 早愛滄溟仙
 蓬壺雖冥絕 心跡頗相誤
 鸞鶴心悠然 世事空徂選
 歸來桃花巖 歸來丹巖曲
 得憩雲臆眠 得憩青霞眠

〔安陸白兆山桃花巖、寄劉侍御緝〕の始めの部分。
 一に「春歸桃花巖、貽許侍御」に作ると宋本注註に
 いう。

雲臥す 三十年
 閑を好み復た山を愛す
 蓬壺は冥絶なりと雖も
 鸞鶴の心は悠然たり
 歸來す桃花の巖に
 雲窓に憩ひて眠るを得たり
 仙人東方生 東方不辭家
 浩蕩弄雲海 獨訪紫泥海
 沛然乘天遊 時人少相逢
 獨往失所在 往往失所在

〔送王屋山人魏萬還王屋〕の始めの部分。

仙人 東方生(東方朔)
 浩蕩 雲海を弄す
 沛然 天に乗じて遊び
 獨往 所在を失ふ

東方 家を辭さず(?)
 獨り訪ふ 紫泥の海を
 時人 相逢ふこと少なり
 往々にして所在を失ふ

越水遶碧山 蹈海思仲連
 周廻數千里 遊山慕康樂
 乃是天鏡中 攀雲窮千峰
 分明盡相似 弄水涉萬壑

〔越中秋懷一〕の始めの部分。

越水 碧山を遶り 海を蹈みては仲連(魯仲連)を思ひ
 周廻 數千里 山を遊びては康樂(謝靈運)を慕ふ
 乃ちこれ天鏡の中 雲に攀ち 千峰を窮め
 分明に盡く相似たり 水を弄し 萬壑を渉る

「越中秋懷」の場合には、その部分の押韻まで異にしている。このようにいちじるしいちがいを示す一本が、原作者の李白において二様の(あるいはそれ以上の)作品を作つたそのそれぞれが、たまたまこんにちに殘されたのであるとする事ができるならば、ことはかんだのである。しかし、中にはそうしたものもあるかもしれないもの、おおむねはそうした経緯によつてこれらの異本の詩が生み出されたのではないであろう。李白の名において、李白の詩の享受者が参加することによつて變容されたものも、たしかにあつたと考えられる。

上掲の例は、みなうたい始めの部分であるのもおもしろい。李白の詩の場合、句の變動を示すものがうたい始めの部分に限られるということはないのであるが、しかししばしばうたい始めの部分に、いちじるしくちがつた句の傳承

が見られる。歌曲や歌謡曲のうたい始めの部分をふとどわすれるということは、われわれのしばしば経験するところであるが、記憶によつて伝えられるものは、とかく始めの部分が變動しやすいということがあるのかもしれない。

三

上掲の例において、「哭宣城善釀紀叟」や「感寓」八其二V、「安陸白兆山桃花巖、寄劉侍御綰」は、一本においてその題を異にしていた。そのことは、この作品が、ちがつた場における作品として一には伝えられていることを示している。ところでこんにちの李太白文集においては、題を異にし、表現を若干異にするがために、別の詩として集録されているものがあるが、その中には實は、同一の作品が傳承の過程において少しずつ變化して、さながら二様の作品であるかのごとく見なされたものがあつたのではないかと思う。花房英樹氏の尊敬すべき業績「李白歌詩索引」において、近似する作品については、その「各本編次表」の備考に注記されているが、それによれば次の十例が、題を異にしつつも近似する作品であると注意されている。

1 「古風」八其二七V(宋本、王本共に卷二)と「感興」八其一

六V(宋本卷二二、王本卷二四)。全十句のうち、一句はまつたく同じく、四句は類似するが、あるいは實際に別の作品であつたかもしれない。

2 「古風」八其三六V(前に同じ)と「感興」八其七V(前

に同じ)。全十二句のうち、五句はまつたく同じく、四句は類似する。

3 「古風」八其四七V(前に同じ)と「感興」八其四V(前に同じ)。後に例示する。

4 「白頭吟」二首(宋本、王本共に卷四)として傳える八其一Vと八其二V。長篇の詩で、句數も異なるが、始めの四句と終りの部分とはほぼ同じく、また作品の趣向も共通する。しかしながら、あるいはこれは、原作者李白において、二様の作品を作つたのかもしれない。樂府のスタイルに従う作品は、もともと習作的要素を含むがゆえに、同一の題、同一の趣向で、二様の作品を作るということも、ありうることであらう。

5 「大堤曲」(宋本、王本共に卷五)と「寄遠」八其五V(宋本卷二四、王本卷二五)。全十句のうち、はじめの部分の三句を異にするほか、他の部分はほぼ同じ。

6 「東武吟」(宋本、王本共に卷五)と「遷山留別金門知己」(宋本卷十三、王本卷十五)。全三十四句。若干の異同を見るのみ。王琦の卷十五の註にもいう、「此篇即五卷之東武吟也、句字互有同異、今仍舊本兩守之、注不重出。」

7 「白雲歌、送別劉十六歸山」(宋本、王本共に卷七)と「白雲歌、送友人」(宋本卷十五、王本卷十七)。後に例示する。

8 「贈錢徵君少陽」(宋本卷十一、王本卷十二)と「送趙雲

卿」(宋本卷十五、王本卷十八)。王琦の「送趙雲卿」の注にいう、「此篇、與十二卷內贈錢徵君少陽詩、無一字差異、蓋編者重入、未刪。」

9 「過彭蠡塗」と「入彭蠡、經松門觀石鏡、緬懷謝康樂、題詩書遊覽之志」(共に、宋本は卷二十、王本は卷二十一)

二)前者は五言十六句、後者は五言二十句であるが、はじめの部分、および終りの部分がほぼ同じである。王琦の注にいう、「舊註二篇、或同或異、故并錄之。」

10 「擬古」ハ其十一V(宋本卷二十一、王本卷二十四)と「折荷有贈」(宋本卷二十四、王本卷二十五)。後に例示する。右の十例のうち、具體例をいくつかとりあげてみる。

3 桃花開東園

含笑誇白日

偶蒙春風榮

生一作矜 此豔陽質

豈無佳人色

但恐花不實

宛轉龍火飛

零落早相失

詎知南山松

獨立自蕭颯

「古風」ハ其四七V

桃花東園に開き

芙蓉嬌綠波

桃李誇白日

〃

〃

〃

〃

〃

零落互相失

詎知凌寒松

千載長守之

「感興」ハ其四V

一芙蓉綠波に嬌たり

笑を含みて白日に誇る

偶、春風の榮を蒙りこの豔陽の質を生ず(矜る)

あに佳人の色無からんやただ恐る花の實らざるを宛轉して龍火飛べば

零落して早に相失ふ詎ぞ知らん南山の松は獨立して自ら蕭颯たり

7 楚山秦山皆白雲

白雲處處長隨君

長隨君

君入楚山裏

雲亦隨君渡湘水

湘水上 女羅衣

白雲堪臥君早歸

「白雲歌送劉十六歸山」

楚山・秦山皆白雲

白雲處處長に君に隨ふ

長に君に隨ふ

君は入る楚山の裏に雲もまた君に隨ひて湘水を渡るまはる

湘水の上、女羅の衣

白雲臥するに堪へたり君早に歸れ

桃李白日に誇る

〃

〃

零落して互ひに相失ふ詎ぞ知らん寒を凌ぐの松は千載長くこれを守る

楚山秦山多白雲

白雲處處長隨君

君今還入楚山裏

雲亦隨君渡湘水

水上女羅衣白雲

早臥早行君早起

「白雲歌送友人」

楚山・秦山白雲多し

〃

君今還りて楚山の裏に入る

水上の女羅も白雲を衣る(?)

早に臥し早に行き君早に起て(?)

10 涉江弄秋水

愛此荷花鮮

攀荷弄其珠

蕩漾不成圓

佳期綵雲重

欲贈隔遠天

相思無由見

悵望涼風前

「擬古」八其十一

江を涉つて秋水を弄もてあそびび（瓠ぼび）

この荷花（江藻）の鮮を愛あづ

荷を攀つかみて その珠を弄するに

蕩漾 圓を成さず

佳期（佳人）綵雲重なり（の裏うらも）

贈らんと欲するも 遠天を隔へつ

相思 見るに由よし（因）なし

悵望す 涼風の前に

涉江翫秋水

愛此紅藻鮮

〃

〃

佳人綵雲重

〃

相思無因見

〃

「折荷有贈」

別の詩題のもとに別の作品として収載されているもので類似する句を多く含むものが、すべて、一つの原作の傳承（傳誦）による相違であるとすることは、もとより危険であろう。4の場合について考えたように、原作者李白において、同一題材同一趣向で二つ以上のものが作られている場

合も、あるいはあつたかもしれない。李白は、作詩のスピードも早く、かつ興の赴くがままに濫作もした詩人であろうから、ある作品を人に書き與えるといった場合、そのつど修改を加えたり、またはその場の興にひかれて一部を變更したりする例もあつたであろう。しかし李白詩の「異本」は、李白の手を離れて人口に口誦される過程において、大きな振幅をもちついろいろな生み出された可能性も、一方にはたしかに強いことを、上掲の具體例はものがたつてい

鳴沙石室佚書に、羅振玉によつて「唐人選唐詩」と命名されている二十葉の殘卷が收められている。そのなかには李白の詩が四十數首にわたつて記録されているが、そこに記されている李白の詩が、こんにちの李太白文集や全唐詩に掲げるものとはしばしばかなり異なるものであることは、羅振玉の解説においてすでにのべられているとおりである。それはまた、中華書局刊（一九五八）の唐人選唐詩十種の解説にも記されている。そこに掲げられた李白の作品「獨不見」は、李太白文集に掲げる「獨不見」（宋本、王本共に卷四）が五言十四句に作るのに對して、五言十句に作り、文集において出はじめの二句を「白馬誰家子、黃龍邊塞兒」に作るのに、鳴沙本は「白馬黃金塞、雲沙繞夢思」に作るのをはじめとして、各句の措辭は一見まつたく異なるのであるが、しかし情景、ないしはムードは、共通するものがあ

る。そして文集においては終りの二句を「終然獨不見、流淚空自知」に作るのに對して、鳴沙本の方も「無然獨不見、流淚空自知」に作る。鳴沙本にしるされた「獨不見」は、いちじろしく變改され、通俗化された一異本であるともみることができよう。この例は、格別に極端な變容ではあるうが、傳誦による作品の變化は、相當に流動的、かつ融通自在であつたことを想像させる。

四

李白は、寶應元年（七六二）十一月、族叔の李陽冰の宅で病歿したのであるが、その李陽冰の撰に成る草堂集序に、「當時著述、十喪其九、今所存者、皆得之他人焉」として書かれている。かれの詩は、集められた當初において、そもそもが他人から得たものであつた。別にまた、李白と同時の人である魏顥によつて李翰林集が編纂されたが、それも諸方に散在する李白の作品を集めたものと見られる。魏顥の李翰林集序に、「文有差互者、兩舉之」という。魏顥においてすでに、異本はこれを兩存せしめたものであつた。李白の詩は、かれの在世中から變動があつたことを知る。しかしその李陽冰が輯めた草堂集も、また魏顥が別に整理した李翰林集も、それに直接つらなる系譜のテキストは残されていない。冒頭にのべたように、われわれは李白の詩文集の現存最古のテキストとして、十一世紀以降のものを見るのみである。

杜甫の集がどのようにして傳來したかはなお明かでないが、今日見られる宋版杜工部集二十卷の内容が、宋人によつて整理されたものであることは、ほぼ誤りあるまい。李白（一七六二）・杜甫（一七七〇）が歿してより、現存のテキストの成立を見るまで、二世紀から三世紀に近い時間の経過を見るのであるが、その時間の経過において、作品を享受する側において少しずつ加えられた修改がないとはいきれぬ。理論的には、作者の死後、作品は享受者のふところにおいて、享受者の好みを満たしつつ生きてきたともいえる。その作品が通俗性をもつて口誦され、より多くの人に愛されたものであればあるほど、作品の變動ははげしかつたであろう。李白の詩においては、そうした性格を觀察することができる。

杜甫の作品においては、どうであつたであろうか。杜甫の集においても、たとえば「白絲行」（卷二）の中の句が、宋本にするす一本において次のように變化し、

香汗輕塵汚顏色↓香汗清塵似微汚↓

香汗清塵汚不著↓香汗清塵似顏色（白絲行）

また次の例のように、一首において句の變動の著しいものもある。

春寒野陰風景暮↓花繁草青春日暮

惜君只欲苦死留

我欲苦留君富貴

富貴何如草頭露

何如草頭易晞露

(共に「送孔巢父謝病歸遊江東、兼呈李白」八卷
一V)

また「入奏行」(卷四)や「過郭代公故宅」(卷五)のよう
に、一本において二句多いという例もある。あるいはまた
「兩當縣吳十侍御江上宅」(卷三)の場合のように、句の一
部の順序が一本においていれちがつて傳承されているとい
う例もある。「一本」の異同は、人口に親しまれてきた作
品において、やや顯著であるかもしれない。

長者雖有問

役夫敢申恨

且如今年冬

未休關西卒

(「兵車行」八卷一V)

有孫母未去

出入無完裙

(「石壕吏」八卷二V)

ただし、杜甫の場合、一・二句の表現が若干變つて
傳えられているということはあつても、李白の詩に見られ
たような詩句の相當に融通自在な變動というのは、求める
ことができない。杜詩の場合、一本において句數に變動が
あるのは、古詩においてなお先に示した二例にとどまるよ
うである。

李白の詩における句のはげしい變動は、李白の詩におい

て顯著な現象であるといわなければならない。そのことは
李白の詩の特性を考える場合、やはり無視し得ぬことであ
ろう。李白の詩は、スケールの大きい空想性ゆたかな表現
そしてまたダイナミックな力量において、他の詩人の追隨
を許さぬ持ち味を有する。あるときはきわめて夢幻的であ
り、あるときはかぎりなく豪放である。その李白に特有な
持ち味が多くの人に愛されて、人の口から口へと口ずさま
れ流傳する傾向が、かなり濃厚にあつたのではないかと思
う。もちろん記録をとおして、原作が比較的忠實に傳承さ
れるということも、當然一方においてはあつたにはちがひ
ない。しかしまた、生きた文藝として享受者のふところに
いだかれながら、しばしばは享受者の思いもこめられ、そ
の夢が託されつつ、李白の名のもとに不特定の享受者が參
加する作品として、流轉的に傳誦される傾向も少なからず
あつたにちがひなく思われる。

李白の詩には、讀者による比較的自由的な受容を可能にす
る傾向が、より強かつたといえよう。その詩の一部の句の
表現が變えられたり、句數に變動があつたり、ある部分の
句があつたりなかつたりするのは、當然のこととして、詩
を粗放にせずにはおかない。李白の詩として現存するもの
に時おり見られる粗放さは、生きた文藝として流傳される
過程においていよいよそうなつてきたということも、考え
てよいであらう。理論的にいえば、杜甫の詩にもそうした

現象がまつたくなかといへないはずである。しかしながら杜甫の詩は、少数の例外を除いて、一般的現象としては讀者のふところに抱かれて讀者による變容を許すことを、おそらくは拒否したのであろう。その作品は、他人の、より自由な息づかいを加えることが困難なほど、表現と表現との脈絡が神経質であり、緊密であつたということができよう。

李白の詩は、當時、およびその死後において、多くの人たちに愛された詩であつた。それは高らかに口ずさまれるのにふさわしいものが多かつたのである。わたくしは、一部の李白の詩において、かつての漢魏の民間歌謠にもうかがわれたような健康な氣骨と、奔放な情熱とを見る。李白の詩に、漢魏の民間歌謠にあやかると樂府的风格の作品や、古詩にあやかるとある作品が多くあるということばかりでなく、作品の持ち味において、漢魏の民間歌謠的な粗放さを、しばしば感ずる。凝つた表現を間々用いつつもダイナミックに流動的であり、かつ意外に大衆的、通俗的である。李白の詩は、歌謠歌辭であることをすでに離れるものではあつても、朗吟にふさわしい文學として、歌謠文學にやはり近い性格のものが、その一部にはたしかに流れているであらう。

李白の詩は、盛唐の人々の夢を、その時代の民衆に代つてうたうものであるとする見解が、革命後の中國において

は普遍的であるが、この考え方は、違つた角度から認識されなおしてよいかもしれない。李白の詩のある作品は、たしかに、その時代の人々の夢が、間接に託されている。それらの作品は、李白の名を冠しつつ、享受者が相當有力に参加する文學になつており、その意味で、李白の詩は、その時代の大衆の精神の象徴的存在であるともいえよう。讀者による、より自由な受容を許してきたことは、李白の詩の一面の特性を示すものである。それは杜甫の詩が、より多くの讀者による變動的受容を、どちらかといへば拒否する傾向にあつたのと對照的である。こうして李白の詩は、傳承の過程にいよいよふくらみ、おおらかになり、杜甫の詩は逆に、いよいよ固く凝縮してゆく方向に赴いたということも可能であらう。

(本学助教)